

# 葉ネギ

|      | 1                                                                                                                                               | 2 | 3 | 4 | 5 | 6 | 7 | 8 | 9 | 10 | 11 | 12 |
|------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---|---|---|---|---|---|---|---|----|----|----|
| 作型   |                                                                                                                                                 |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |
| 主な作業 | <div> <div>育 播</div> <div>苗 種</div> <div>準 備</div> </div> <div> <div>定 定</div> <div>植 植</div> <div>準 備</div> </div> <div> <div>収 穫</div> </div> |   |   |   |   |   |   |   |   |    |    |    |

ネギ

ユリ科、原産地：中国西北部

作物名

葉ネギ

学 名

Allium fistulosum L.

作 型

春まき

## 技 術 体 系

### 1 作型の特徴

葉ネギは、軟白部だけでなく葉身部も食用にするため関西を中心に古くから主に西日本で発達した栽培で、春播き秋冬どり、夏まき冬どり、秋まき越冬秋冬どりの3タイプが基本となる。

春まきは生育期間がほとんど適温のため、栽培は容易であり、育苗方法、品種などを変えることによって長期間の出荷が可能である。収穫時の大きさは根深ネギほど厳密に限定されていない。

### 2 適応地域

平坦地域（秋どり：中山間地域可）

### 3 栽培条件

#### (1) 温度

- 発芽適温 15 ～ 25℃  
(30℃では発芽率低下、10℃以下では遅延)
- 生育適温 15 ～ 20℃  
(25℃以上では生育は抑えられる)

品種によっては耐寒性が極めて強い。耐暑性の強い品種では亜熱帯でも生育することができ、気候適応性は大きい。

花芽分化は品種間差があるがタマネギより敏感で、低温短日条件下で起こりやすく、高温長日条件下で抽だいが促進される。ある程度大きくなった株が低温に遭遇すると花芽分化する。しかし、自然条件下の花芽分化期は、品種、株の発育程度、栽培地の気温や日長条件によって異なり、地域の立地条件や需要に応じて作型が分化している。

#### (2) 光

種子は嫌光性で播種時の遮光が発芽を安定させる。暗所のほうが明所より発芽が早い。

#### (3) 土壌条件

土壌の適応性は広く水分が多いほど生育は旺盛。土壌酸度に対する適応性の幅は広く、土壌酸度が pH5.7 ～ 7.4 の範囲であればほぼ正常に生育する。しかし、pH が低いと生育が急に悪くなる。根は浅根性で酸素要求量は大きく、排水の悪いところでは生育が劣る。

#### (4) 肥料

ネギの根は肥料やけを起こしやすく、定植直後には肥料の吸収が少ないので基肥は少な目とし、追肥主体とする。

### 4 経営目標（鳥取県資料参照）

- |           |                |
|-----------|----------------|
| (1)収 量    | 2 ～ 3 t / 10 a |
| (2)投下労働時間 | 430 時間 / 10 a  |
| (3)所 得 率  | 5 0 %          |
| (4)経営規模   | 5 0 a          |
- （家族労働力2名の場合）

## 栽 培 技 術

### 1 品種と特性

作型により耐寒性、耐暑性、抽だい性、分けつ性等を考慮して品種を選択する。千住系（金長等）九条系（浅黄等）に多くの品種がある。

（軟白ネギと同じものでもよい）

熊本の伝統野菜である「熊本ねぎ」も九条系の品種である。

### 2 育苗

#### (1) 育苗床

10 a 当たり 3 a を苗床として準備する。ウィルス病の他、土壤伝染性病害回避のため連作地を避ける。

播種 1 ヶ月前に碎土整地する。

| 苗床の施肥量 (kg/a) |     |                               |                  |
|---------------|-----|-------------------------------|------------------|
|               | N   | P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> | K <sub>2</sub> O |
| 基肥            | 0.6 | 7.0                           | 0.07             |

育苗時の施肥の影響を受けやすく、特に P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> の影響が大きい（定植後の生育に影響）。

#### (2) 播種

10 a 当たりの播種量は 1 畝程度必要で、畦幅 120cm の平床にうすく条播きする。

機械移植の場合は専用のセルトレイ（チェーン式ペーパーポット等）を用い、コーティング種子を 1 穴に 3 粒程度播種し、やや深めに覆土する。

#### (3) 育苗中の管理

発芽が揃うまで乾燥させないようにこまめに灌水し、不織布や寒冷紗等をべたがけする。また、育苗中も土壤水分に注意し、乾燥と滞水に注意する。

追肥は、生育状態に応じて 2～3 回施用し、除草を兼ねて苗の密生しているところや萎縮した苗の間引きを行い均一化を図る。

セル苗は育苗期間中の倒伏防止と機械移植に適した 10～20cm の充実した苗にするため剪葉す

る。剪葉は 10～15cm 程度に行う。ネギは移植適期幅が広く、育苗期間が長いほど収穫までの日数が短くなる傾向があり、剪葉を行い移植期を遅らすこともできる。

### 3 定植

#### (1) 本圃の準備

排水の良い圃場を選定し、定植 2 週間前には堆肥、苦土石灰を施用し、耕起整地しておく。

#### (2) 施肥

| 施肥量 (kg/10a) |    |                               |                  |
|--------------|----|-------------------------------|------------------|
|              | N  | P <sub>2</sub> O <sub>5</sub> | K <sub>2</sub> O |
| 基肥           | 10 | 20                            | 10               |
| 追肥           | 15 | —                             | 10               |
| 全量           | 25 | 20                            | 20               |

ネギの生育は作型によって異なるが、定植 1～2 ヶ月間は緩やかで、3～4 ヶ月で急速に増加して重量は 3～4 倍になる。養分吸収は全体の 50～80 % がこの時期に吸収される。従って施肥はネギの生育に応じて行い、連続して肥効があらわれるような施肥法がよく、緩効性肥料の使用や分肥するのがよい。

苗が標準的な養分吸収をしていれば、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> と K<sub>2</sub>O の増減の影響は少ないが、N の影響は大きい。

春まき冬どり型の標準的な施肥成分量は 10 a 当たり N 20～30kg、P<sub>2</sub>O<sub>5</sub> 15～20kg、K<sub>2</sub>O 15～20kg であり、春まき秋どりの作型はやや少なめでよい。

ただし、収穫期を延長したり収量を多く望む場合は増肥が必要である。

#### (3) 苗の選別

苗は、当日植える分だけをできるかぎり根を切らないように掘り取り、健全な苗を大、中、小に選別する。

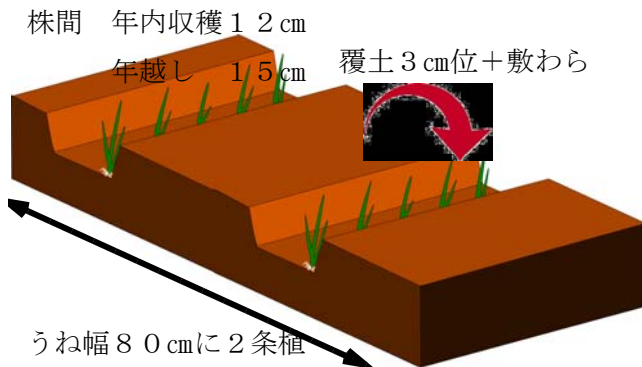
#### (4) 定植

深さ 5 cm 程度の条を切り 3～4 本の苗を深植にならないように注意しやや浅めに植え付ける。

栽植密度は畦幅 80cm に 2 条植えとし、年内収

穫の場合株間 12cm、年越しの場合は 15cm 程度とする。覆土は 3 cm 位行い敷きワラをして活着の促進を図る。

セル苗は播種後 40 ～ 60 日を目安と、高温や乾燥に弱いので定植は午前中や夕方の涼しいときに行う。



#### 4 定植後の管理

##### (1) 追肥、中耕、土寄せ

定植後 20 日位を過ぎると新根新葉が成長し分球も始まるので、土寄せと同時に中耕、追肥を行う。一度に多量の土寄せは生育障害を起こしやすいので少量の土寄せとする。2 回目以降は生育をみながら行う。また、収穫期を遅らせる場合は窒素を主体に追肥する。

#### 5 収 穫

長さ 60 ～ 90cm、太さ 5 ～ 16mm 程度に十分生育した茎葉を収穫し、規格別に仕分けし出荷する。